

津波の記憶

藤井弘章

はじめに

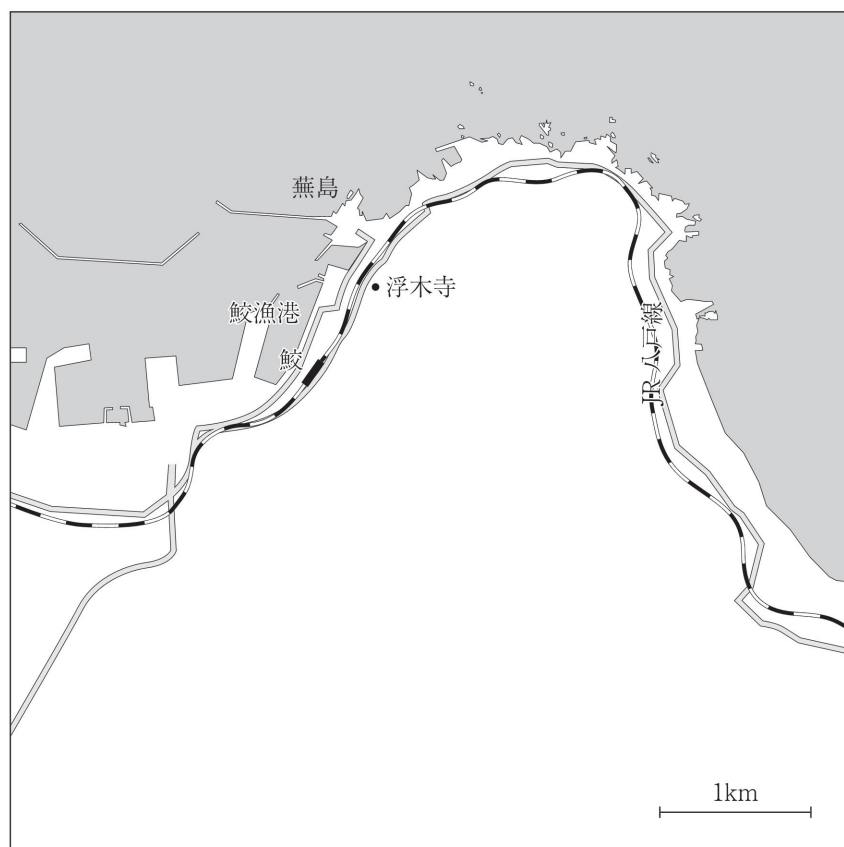
平成二三年（二〇一一）三月二一日、午後二時四六分、東北地方太平洋沖でマグニチュード九という巨大地震が発生、その後、東北太平洋沿岸に大津波が押し寄せた。とくに、三陸沿岸は、津波の常襲地帯として津波の記憶が記録、伝承され、訓練なども行われてきた地域であった。それにもかかわらず、一〇〇〇年に一度といわれるような大津波によって、甚大な被害が出てしまった。震災の体験は個人によってさまざまである。自治体などが中心となつて、多くの方々の体験を記録していく作業が進められている。今後の防災のためには、一人でも多くの体験、記憶を語り継いでおく必要がある。わずかではあるが、筆者が被災地の方々から聞かせていただいた津波の体験談を報告させていただく。あわせて、筆者が震災前に訪れた沿岸地域の写真も可能な限り掲載する。

一 青森県八戸市

八戸市鮫地区は港町として栄えてきたところである。平成二四年（二〇一二）八月、港を望む高台にある浮木寺住職の中村好伸氏に津波の話をつかかった。

平成二三年（二〇一一）三月二一日の地震は長かった。大きな揺れとは思わなかった。仏像は一つも倒れな

かった。燭台が一つ倒れた
だけだった。JR八戸線よ
りも下は津波が来た。流さ
れた家もある。水産加工関
係がやられた。船も流され
た。人的被害は少なかつ
た。時間帯がよかった。夜
中だったら大変だった。線
路（八戸線）の上まで逃げ
たらまず助かる。普通は蕪
島をぐるっと回って津波が
来る。今回は回らないで
まっすぐ来た。流れなかつ
た船もあった。蕪島の横に
ある海水浴場の防波堤が壊
れた（写真2）。八戸は震
源と震源の間。まる二日停
電した。情報はなかった。
最初はこの辺りだけ停電だ



地図1 八戸市鮫地区

二 岩手県普代村

普代村は明治二九年（一八九六）、昭和八年（一九三三）の津波で大きな被害を受けた。昭和一三年（一九三八）に海村調査の際に桜田勝徳が訪れており、津波のことも断片的ではあるが聞き取りをしている。同じ普代村でも、

てもものがなかった。あとは何もなかった。

地震があると公園などから海を見ている。水が引いて海の底が見えたらどんと来る。今回は位牌が倒れていなか見て回っていた。二、三波ぐらいの津波は見た。

自分が高校のときに十勝沖地震があった。今回よりひどかった。昭和四三年五月一六日だった。



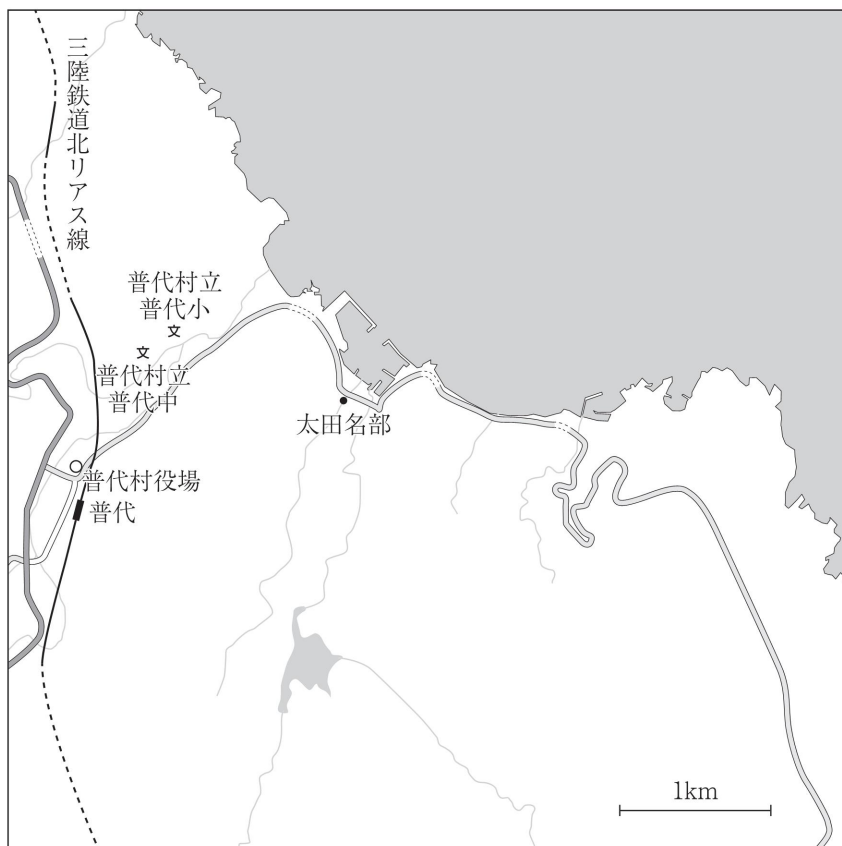
▲写真1 鮫の港と集落（高台の大きな根が浮木寺）(2012年8月撮影)



▲写真2 蕪島と壊れた堤防（2012年8月撮影）

と思った。電気がついてテレビをついたら、これはどこだという話になった。車のラジオをつければ分かったと思うが、自分はテレビをつけて初めて知った。こんなにひどい状況だったかと初めて知った。水道はきていた。都市ガスは止まった。プロパンはあった。耐震性の水道にしている。電話もだめだった。ガソリンもなかった。ガソリンスタンドに並んで渋滞した。スーパーに入っ

段丘の上に位置する堀内ほりないや黒崎では被害は少なかつたが、低地に位置する太田名部や普代では被害が甚大であった。桜田の「採集手帖」(成城大学民俗学研究所蔵)には、太田名部だけで明治二十九年には二二〇人、昭和八年には一〇二人の人が亡くなつたと記されている。二度の大津波に襲われた太田名部では、物的な被害も大きく、集落が壊滅するほどであつたといふ。その後、成城大学民俗学研究所主催で海村調査の追跡調査を行った際には、平成一一年(一九九九)に筆者が普代村を調査している。当時に撮影した写真と震災後に撮



地図2 普代村

津波の記憶



▲写真5 昭和8年の津波の到達点（2012年8月撮影）



▲写真3 防潮堤の上から太田名部の集落を望む（1999年5月撮影）



▲写真6 昭和8年の津波の到達点とその後復興した太田名部の集落（2012年8月撮影）



▲写真4 防潮堤の上から太田名部の集落を望む（2012年8月撮影）



▲写真7 普代の水門

影した写真を比べても、集落の景観に大きな変化がないことがうかがえる（写真3、4）。

明治、昭和の津波の教訓を踏まえて、津波から集落を守るために、昭和四〇年代になって、太田名部と普代の両地区ではそれぞれ防潮堤が建設された。太田名部の集落は城塞都市のような堤防で囲われ、

巨大な水門から出入りするようになっていいる。太田名部の防潮堤は高さが一五・五m、全長一五五mある。普代では防潮堤建設後にさらに外側に学校ができたため、昭和五九年（一九八四）、普代川河口に新たに長さ一〇五m、高さ一五mの防潮堤と水門が築かれた（写真7）。建設当初は批判もあつたというが、平成二三年の震災では、太田名部の港に津波が押し寄せたが、人家が流失するようなことはなく、集落内の人命も失われることはなかった。



地図3 宮古市鉾ヶ崎地区

津波の記憶

三 岩手県宮古市

1 鍬ヶ崎

宮古市の中心部に接している鍬ヶ崎には平成十一年（一九九九）に調査に訪れていた。鍬ヶ崎の北西部に位置する蛸の浜町には二〇〇軒ぐらいたつたが、平成二十三年（二〇一一）の津波で一〇〇軒以上流された。心公院の住職に話をうかがうと、先に蛸の浜から津波が来た。このときは、路上の駐車車が流されたぐらいであつたが、そのあと、宮古湾から来た津波で家が流されたという。

2 重茂

宮古市の重茂半島東側に石浜という小さな集落がある。石浜には平成二十二年（二〇一〇）に調査で訪れていた。平成二十四年（二〇一二）八月に再訪し



▲写真8 心公院から鍬ヶ崎を望む（1999年7月撮影）



▲写真9 心公院から鍬ヶ崎を望む（2012年8月撮影）



▲写真10 集落から心公院方面を望む（2012年8月撮影）



▲写真11 墓地から蛸の浜を望む（2012年8月撮影）

た際、浜を散歩していたおじいさんに話をうかがった。この方によると、震災前には石浜には三三軒あったが、津波で六軒流されたという。平成一一年に撮影した写真と平成二四年に撮影した写真を比較すると、浜に近い家や倉庫がなくなっている様子がうかがえる（写真12、13、14）。また、浜に立ち並んでいた石塔も流されている（写真15、16）。全体に土地が五〇cm沈下したという。石浜は港が残ったが隣の集落はなくなつたという。

3 昭和の津波

平成一一年（一九九九）、



地図4 宮古市重茂石浜地区



▲写真14 石浜の川（2000年8月撮影）



▲写真12 石浜の川（2000年8月撮影）



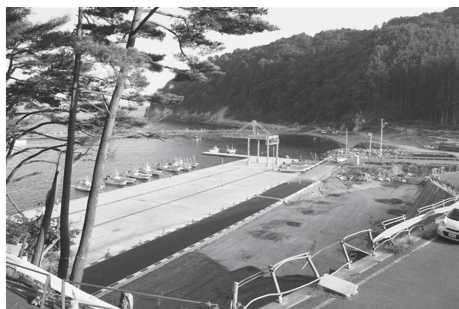
▲写真13 石浜の川（2012年8月撮影）

宮古市赤前出身で大謀網の網元をしていた堀内良司氏（大正九年生まれ）・イセ氏（大正一二年生まれ）夫妻に三陸の漁村の習俗について聞き取りをしていた。津波のことは意識的に聞いていなかったが、自分の調査ノートを見直すと、わずかではあるが津波のことも話題に出していた。

昭和八年の津波のときには沖が光ったという。逃げ帰ろうとすると津波のほうに先にきた。

昭和八年三月三日の大津波で出荷直前のカスタマ（イワシを脱水してからくだいて乾かしたものはほとんど流された）。

自分（良司氏）は昭和五年から二〇年ごろまで網元をしていた。宮古湾には秋に南下するイワシが入り、アグリ網でこれをとった。九月から一二月で、三月か



▲写真17 石浜の港（2012年8月撮影）



▲写真15 浜に立ち並ぶ石塔（2000年8月撮影）



▲写真18 石浜の津波到達地点の石碑（2012年8月撮影）



▲写真16 石塔の跡地（2012年8月撮影）

四 岩手県釜石市
 1 箱崎白浜
 平成一二年（二〇〇〇）に、箱崎白浜にあるという「亀供養」の石碑を訪ねて、同地の佐々木長七氏を訪ねたことがあった。震災後の平成二四年（二〇一二）八月に、再び佐々木氏のお宅

ら八月は湾内には漁がない。昭和八年の天津波後、イワシがとれなくなり、商売がうまくいかなくなつて南に出て行って定置網をするようになった。
 自分（イセ氏）は生まれた年に白浜の人たちが伊勢参宮をしたことにちなんで命名された。イセさん自身も昭和八年の三月ごろに伊勢に行った。下関にいたときに天津波の連絡があった。

津波の記憶

を訪ねたところ、長七氏は震災前に亡くなっておられたが、長七氏の妻の佐々木ヒサ氏（昭和六年生まれ）と息子の佐々木利久氏（昭和二六年生まれ）に話をうかがうことができた。まず、ヒサ氏の話である。

長七氏がいたときは、白浜は一三〇何軒があった。津波で四〇何人亡くなった。

地震のときは、家の二階にいた。あんまり揺れるから、べちゃんと家をつぶされるよりは、畑に行って死んだ方がいいと思って降りてきた。津波の放送があったという人もいる。分らな



地図5 釜石市箱崎地区

かった。足元まで水が来た。水道が破れて水が来たんだと思った。明日から水道を使うのが大変だと思っていた。「津波は川をたずねて上がる」という。そのうちに、膝まで水が来た。隣まで流れて、泳いでいたら、引き水が来た。角まで流れて、はねて家へ入った。茶ダンスの場所が変わっていた。下駄箱がなかったので、裸足で避難した。家まで津波が入った。

畑で一晩泊った。むしろをかぶって寝ていた。寒かった。みんな流れて死んでしまったのかなと思っていた。朝になると、あそこにもいる、ここにもいるといつてわかった。うちではだれも死んでいない。下のおじいさんは昼寝をしていて流された。本家では蔵も人も流された。隣も流れた。どんどん水が入ったけど、うちは流されなかった。畳を五〇何枚替えた。



▲写真 19 佐々木ヒサ氏・利久氏（2012年8月撮影）



▲写真 20 佐々木氏の家（2012年8月撮影）



▲写真 21 佐々木氏の家に残る津波の跡（2012年8月撮影）



▲写真 22 防波堤から大槌湾を望む (2012年8月撮影)

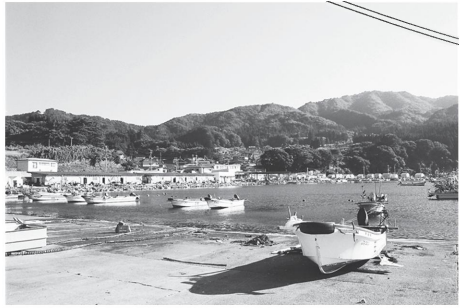


▲写真 23 港近くの大木 (2012年8月撮影)

あれ忘れたといつて、取りに戻って生きた人はないから、そういうことはするもんでないと聞いていた。今回も、取りに戻って生きた人はいない。おじさんの子も、店のねえさんも流された。あれを持ってくればよかったと戻った人が流された。昔の人が言っていたのは本当だった。

夜に起きたら、泣き声で寝られなかった。起きたらだれもいない。窓を開けてもだれもいない。笑ったり、泣いたりしている。息子がカセットを入れているのかと思って、見たけどなかった。そのときは、みんな亡くなっているから、魂が来た。息子も泣き声で寝られなかったという。安藤が浜の人は、「助けてー、助けてー」という声が聞こえたという。娘が大槌に嫁に行っている。(白浜は大槌の対岸にあたるので、大槌から)白浜に赤い火が一回燃えるのが見えたという。白浜が火事だと思ったという。白浜だよ、おらは死んだよ、といっていたと思う。

その後、学校に泊まった。おにぎりを一つもらって食べた。白浜の学校は最後までヘリが来て、食べ物を運んでくれた。豊富だった。それから、ヘリで花巻に避難した。そのへんに行くと思っていたら花巻まで行った。花巻の温泉に三か月いた。電気も水道もなかったので行った。昭和八年の津波は知らない。



▲写真 24 箱崎白浜の港と集落（2000年7月撮影）



▲写真 25 箱崎白浜の港と集落（2000年7月撮影）

母さんの話では、だれかを産んでから寝ていたという。流れてきた大した着物を拾ったという。昭和三五年の津波は知っている。上までは津波は来なかった。水がなくなつて、さんばしのほうで船がごろごろしていた。みんなでアワビ、ウニを採った。嫁に来たころだった。ご飯炊きをしていたので自分で行かなかつた。

息子の利久氏にも話をうかがつた。

自分は海岸にいた。一波、二波はたいしたことはなかった。一波は三mぐらい、二波で六mぐらいだった。二波は防波堤を乗り越えた。一波は海岸だけ。二波は避難道路の下まで来た。倉庫の屋根まで来た。これで来ない、終わりに思った。三波が来たとき逃げた。八mも一〇mもある波が来た。それを見て逃げた。下が真っ黒で、上は白くなつていた。大槌のほうから来た。大槌から来るとは思わなかつた。引き潮が来たのではないかとと思う。大槌、鵜住居うのすまいに上がった津波が、崩れてこちらへ来たとしか考えられない。ふつうは津波は湾の外から来る。



▲写真 26 箱崎白浜の港と集落（2012年8月撮影）

倉庫の下にいた人はそのまま流された。避難道路が高くなっている。自分はそこで見ていた。逃げるといった逃げたが、一〇mも走らないうちに流された。ごろんごろんと流された。浮き玉があったのでつかまった。つかまってもだめだった。泳ぐことができない。木の根があったので、つかまえた。かか（妻）と息子も一緒に逃げた。足が速いので、息子はなんとか逃げ切った。かかは自分よりも足が遅く、遅れた。そのうち、軽トラが流されてきた。それに乗れと叫んだ。かかはそれに乗った。そのうちに、引き潮が来たので、軽トラから降りると叫んだ。またごろんごろんと流された。ロープがあったのでつかまえた。もし手を離していたらそのまま流された。水が引いてぼとんと落ちた。

白いのを着いても真っ黒になった。頭は砂だらけになった。前の日に入った風呂の水を頭からかぶって洗った。流されているときにがれきにぶつかって亡くなった人もいる。自分は近くに流れているのが浮き玉などだったので助かった。

三波からあとは知らない。うちへ来れないから学校に上がって行っただ。母親は畑で寝たという。夜中にも津波が来たかもしれないが分らない。

自分は車のエンジンをかけてラジオを聞いていた。三mから六mの波が来るといつていた。放送では三m、といったところで切れた。それを聞いていた人は三mの波が来ると思っていた。三mだと流されない。防波堤がそれ以上あるからなんともない。六mだと防波堤は越えてくるが家は流されない。今度の津波は二一mのところの地面が濡れている。この家は二〇mぐらいいある。倉庫が流された。車も流された。一階の壁に津波のあとが残っている（写真21）。外の壁もずいぶん洗った。

地形によつて、低くても残っている家もある。潮の回りで波の強さは違つた。屋根へ登つた人もいる。流されて、気が付いたら海の中に浮かんでいたという人もいる。流れていた船に乗つて助かつた人が二人いる。一人は箱崎に上がった。一人は根浜の宝来館の辺りに上がった。足が悪くて逃げられない人、つないでいた手を放して、流れて行つた人、などいろんな人がいる。

命でんでんばらばら。泳いで助けられる状況ではない。自分も死んでしまう。車に乗れというぐらゐしかできない。自分は木の根っこをつかまえているだけで必死だつた。自分の命は自分で守るしかないと思つた。

だれしもチリ地震津波のときの感覚があつた。津波がこんなとは思わなかつた。漁師は海岸に財産がある。津波があると流されないように上へ上げる。津波だというと下がっていく。何年かは逃げると思う。

白浜で四〇何人亡くなつた。まだ一六遺体上がつていない。夫婦で亡くなつたのも何組かいる。

津波のあと、二日ぐらゐして学校に集まつた。学校は廃校になつていた。校庭が広いので、運動会るときに使うもので物を運んだ。津波にかからない家もあつた。電気が来ないから、おいても冷蔵庫のものは腐るから、みんなで分けた。それをみんなで食べつないだ。不自由はなかつた。電気がなくても、船で使う発電機をもつていた。部落全部が流されたのではないから、協力してやつた。

海上保安部のヘリが通つた。服を脱いで振つた。何日かたつてヘリが校庭に降りた。大槌は火事になつた。車も真っ黒になつていた。箱崎から向こうは行けなかつた。自衛隊が山をつたつてきた。自衛隊の人に、白浜は孤立状態だから、大槌の火事が飛び火したらヘリも降りられなくなる、どうしますか、といわれたので、全員避難した。自分は飛び火はないと思つたが、自衛隊にいわれた。四、五日ぐらゐしてヘリで避難した。二日がかりで釜石の体育館に避難した。年寄り、病人を先に花巻、北上に送つた。それから健康な人が体育館に行った。自分は七月までいた。遅いほうだつた。家が流されて仮設に入る人もいた。八月ごろまでには仮設ができて入れた。



▲写真 27 鵜住居（一段高くなったところがJR山田線の線路跡。その向こうに釜石東中学校と鵜住居小学校がある）(2012年8月撮影)

白浜の学校にも二棟できた。四組ぐらい入っている。釜石の仮設に行ったり、鵜住居の仮設に行ったりした。第一希望、第二希望というように希望を出した。それで割り振られた。第一希望を白浜にする人は少なかった。子どもたちが学校に行くのが大変ということ。それまで小、中学校は鵜住居まで行っていた。子どもたちはみんな逃げて助かった。山さ逃げた。学校にいて、一緒に行動した人は助かった。休んでいた、早く帰った人は分らない。自分の孫は、当時小学校五年の女の子と、幼稚園の子が二人いる。全員助かった。地震のあと幼稚園は帰る時間だったが、全員で小学校へ行った。小学校と一緒に行動して助かった。「奇跡」といわれるが、子どもたちは奇跡ではないという。いつも訓練をしているから、同じことをやっただけという。子どもたちは、釜石のトンネルを抜けたところの中学校に行ったという。西石より向こう。車で行ったか。新聞紙をかぶって寝たという。寒かったという。

お互いの安否は三日も四日も分らなかった。そのうち、山を越えて歩いてくる人がいた。たまたま会う人がいて確認した。行ったり、きたりしていて、あれも生きていた、これも生きていた、というようになった。避難所を訪ねるとだれがいたと分かる。夜に帰ってきて周囲の人に伝えた。

行方不明者は部落の人が白浜で探した。まずは人を探した。何日かしてからがれきを片付けた。日当が出た。がれきをしながら遺体を探した。何組か分かれて合同で葬式をした。最初、土葬にしようという、大きな穴を二か所ぐらい掘った。市から土葬ということ、やめて火葬になっ

た。火葬場があくのを待つて持つて行つた。市では、一気に遺体を焼くと思つたが、ぼつんぼつんしか出て来なかつたので焼くことになつた。

家の中はがれきの山だつた。海で使つていゝものも入つてきていた。川もがれきでいっぱいだった。梅雨の時期になるから、川だけボランティアに片付けてもらつた。遠野のまごころなんかというところから来ていた。今でも来てゐる。沖繩からも来ていた。外国人も来ていた。台湾からも来ていた。一回目は三〇〇人来た。何人か帰ると何人か来る。交代だつた。

空き屋になつたところを狙つて盗難があつた。大槌では歩いていゝと、脅されて金を出せと言われたという。そういううわさがたつた。夜に一人で歩くなどいつた。それで、一回避難したけど、若いもんが五人でも一〇人でも学校に泊つた。家を流された人は食べるものがないから、釜石では商店街に入つて、食料品を取つて食べたという。

自分は友達や先輩に助けられた。探し探してここへ来た。何がほしいかと聞かれて、タバコと言つと、タバコを持つてきてくれた。自分は七月には家に戻つた。盆には戻つていた。ふすま、畳も友達に早くしてもらつた。みんなに助けられた。

白浜は七〇何cm沈下している。養殖組合は八〇何人いた。今は三〇人になつた。お父さんが流された、うちが流された、などでやめていつた。復興のため、団体でワカメ、ホタテの養殖している。ホタテはまだ売つてない。一月から来年に売る。これで団体は終わり。あとは個人で養殖をやりなさいということになつた。施設が足りないの、国の援助をもらつて作つていゝ。今年のワカメに間に合うように。ワカメは一月に種を蒔いて、三月に出荷する。ホタテは一月過ぎに北海道から入つてくる。一年かけて養殖。以前は、玉ねぎ袋に入れて四年かけて養殖した。津波で網も流されたから、小さいものでも売る。網を洗う機械も流された。簡単なのは



▲写真 28 釜石市街地（左の建物はホテル、海は右側、津波は道路の奥から流れてきた）(2012年8月撮影)

2 市街地

買って育てて売る。今日は暑いので、仕事は終わりにした。今は、個人で養殖するための棚を作っている。チリ地震津波とのきは、川からちよつと上がった。下の木よりもちよつと上。海の中に水がなくなつて、ザルを持って行ってウニ採ったり、アワビを採ったりした。魚がばたばたしていた。学校に行くころだったので覚えている。朝七時ぐらいだった。危なくなかった。

平成二四年（二〇一二）八月、ホテルサンルート釜石の従業員に話をうかがった。

自分は地下室にいたが、相当揺れたので、棚を押さえていた。津波は来ないと思っていた。美容室のお客がパーマをする頭をしたまま歩いてきた。なんだろうと思つたが、今にして思えば逃げていたのだと思う。

地響きがして、ホテルの横の道を津波が流れてきた。これは危ないと、みんな逃げた。引く波もすぐかつたと思うが、見ていない。レストランの中はぐちゃぐちゃになった。車で逃げていた人が、前の道で渋滞になっていた。その車は津波で流された。道路はアーケードになっていた。赤い屋根の家が流れてきた。大きな船が、港に打ち上がっていた。

ホテルの従業員は全員助かった。宿泊のお客一人も助かった。別々の場所にいたが、それぞれ逃げた。向かいの携帯の写真を撮った。動画を撮ればよかつたと思うが、悪いという気持ちがあつて、写真を撮るのが精いっぱいだった。

今ではこんなにしやべつ
ているが、最初は話しかけ
られなかった。地元のお客
で、いつも三人で来ていた
方がいた。二人だなと思っ
ても、話しかけられなかっ
た。二人ですね、と話しか
けると、一人は亡くなった
といわれた。

3 唐丹たか小白浜

唐丹小白浜の盛岩寺には江
戸時代のウミガメ供養塔があ
るため、平成二二年（二〇〇
〇）に調査で訪れた。震災
後、平成二四年（二〇一二）
三月と八月に供養塔の状況を
確認するために盛岩寺を訪れ
ると、供養塔は折れていた。



地図6 釜石市唐丹小白浜地区



▲写真 29 唐丹小白浜の集落（2000年7月撮影）



▲写真 30 唐丹小白浜の集落跡（2012年3月撮影）



▲写真 31 唐丹小白浜の集落跡（2012年8月撮影）

平成二四年八月に盛岩寺住職の三宅俊禪氏に津波のことをうかがった。

本堂の一mちよつとまで津波が来た。海拔二四、五mまで来た。小白浜では寺の周辺が一番高かった。一二mに津波が上がったのは伝わっていない。仏具関係もぐちゃぐちゃになった。本堂はがれきの山になった。庫裏は障子もなくなり、中のもも流された。山門は本堂の階段まで流された。屋根だけ軟着陸した。屋根は解体しないで、重機で吊り上げて、柱は新しくした。鐘つき堂も倒れた。地震では何もなかった。震度五強だった。崩れたものは全然なかった。墓も倒れたものはなかった。四月七日の地震は縦揺れがひどかったので、墓も倒れた。震災当日は、三mの津波が来ますと、防災無線がいつていた。岩手日報の記者が地震が終わったあと、防潮堤



▲写真 32 修復中の盛岩寺（2012年3月撮影）

で写真を撮っていた。三時一五分に波が防潮堤を乗り越えてきた。盛り上がってきた。大したことはなかった。それが引いて、また大きいのが来た。また引いて、また三波が乗っかってきた。そのとき山門が流された。住職は逃げたので山門が流されたのは見ていない。向こうの人は、寺の山門が流されるのを見ていた。地震のあと、津波来るよな、ということ、みんな海を眺めていた。引いたので慌てて逃げた。墓が山なので、墓へ逃げた。寺の向かいにあった二階建ての家が、地蔵さんのところに突きささっていた。海側の道路から来た津波のほうが目立った。このあたりは湾の一番奥なので、両側から津波が来て、ぶつかって高くなる。道路から来た津波で、流された人がある。その人は助かった。下に五〇軒あった家で、一、二軒はまるまる上の道路まで流された。あとは、家同士が重なり合って、ひっくり返ったりしていた。引き潮まで五分もなかった。天井の上に顔を出して助かったという人が二、三人いる。三波以上の大きな波は来ていない。夜中に大きなのが来たという。夕方あった船が、朝になると流されていたという。隣の港まで流されていたという。国道沿いに農協関係のデーサービスセンターがあった。そこに避難した。上に親戚の家がある場合、親戚を頼って避難した。中学校は体育館の床まで波が来た。校舎は地震でひび割れていたので使えない。みんな国道へ上がった。上の住宅は、昭和八年の復興地。それまでは高台には寺しかなかった。昭和八年以降、復興地として沢を埋めて住宅にした。住職は一晩だけ避難所にいた。墓の上に空いた家があったのでそこにいる。三鉄（三陸鉄道）の駅（唐丹）のコンビニに、トラックが突っ込んで火事になった。

年寄りが亡くなっているのが多い。昭和のときにはここまでなかった



▲写真33 防潮堤の石碑（2012年8月撮影）

といって逃げなかった。親から聞いたりして逃げなかった。震災直前の三月九日に地震があつて、津波警報が出た。三〇cmぐらいの波がきた。一日も放送しているのは三mの津波が来ますということだった。陸前高田あたりはこんなところには津波は来なかったといって逃げなかった。

今回の津波は南東から来た。釜石湾はよかった。両石湾は直角に入った。鶴住居の堤防はこの半分。小白浜の堤防は二番目に高い。普代が一番高い。波は入ったが、被害はなかった。昭和六〇年ごろに堤防を作った。波をくだけ郷を守る、と書いた記念碑がある（写真33）。皮肉なことになった。湾のどんじりなので、どうしても津波が高くなる。

ここは犠牲者が少ない。ここは海が見える。

三時一五分に津波が来ているのに、NHKでは四時半ごろまで、釜石では三mの津波が来たといっていた。盛岡から民放のラジオ局が陸前高田に入って、四時ごろには実況していた。津波はどんと一気に上がる。車にぶつかると、車を飲み込まない。二トントトラックでも、一気に上がる。

釜石は駅から東がやられた。駅から西では次の日まで、津波が来たことを知らない人がいた。停電だからテレビは見えない。有線もだめになった。寺の周辺の六軒は一〇月まで地元のテレビ局は映らなかった。それまでは衛星で東京のキー局を直接見ていた。

電話が通じたのは九月。デジタルは最後になった。アナログが優先された。釜石で働いている人は、歩いて次の日に帰ってきた。唐丹に入れば連絡



▲写真 34 盛岩寺に建てられた津波記念碑 (2012年8月撮影)

がつく。携帯が通じたのは彼岸すぎ。唐丹の出身者で内陸にいる人たちが来て、写真を撮って配信していた。それで被害が伝わるようになった。寺までやられているということも伝わった。

南は大船渡まで行けた。大船渡では一日から商売をしていた。自家発電で明かりをつけ、外に出して、豆腐などはただで配っていた。一日になつて、釜石まで道路が通じた。それまでは、買い出しに行くのに、三鉄のトンネルを歩いて行つた。住職は一五日に電話をかけた。

行つた。釜石の駅から西のほうは、一八、九日、彼岸に入るぐらいに電気がついた。電線も流されたので、ここらは三月末に電気がついた。それから水道がついた。最初はしょっぱい海水が入っていて飲めなかつた。四月末までかかつた。五月の連休明けに飲めるようになった。片岸川の伏流水を使っている。沈下して潮水が入つてきた。ここはけっこう湧水が多い。寺の下にも湧水がある。その周りに家はなくなつたので、寺ともう一軒でその湧水を使つていた。寺の西側にも水が湧いている。上の人たちは、自衛隊の給水車が来ていた。ガソリンがないので大変だつた。

釜石は火葬場とゴミ処理場は水につからなかつた。大船渡の火葬場も大丈夫だつた。陸前高田も山のほうにあった。宮城県からも遺体を運んできた。東松島市から一関まで火葬に来ていた。各火葬場には和尚さんがボランティアで入つた。最初は携帯が通じないし、火葬するのは一人か二人だつた。消防団の人が車から運んでいれた。火葬場の人数が足りなかつた。市民課の人が来て、遺体を窯へ入れたりした。



▲写真 35 盛岩寺背後の墓地入口（石段途中の津波記念碑のところまで津波がきた）（2012年8月撮影）

一日の四時ごろから遺体回収が始まった。車の中から出すのが大変だった。硬直していて大変だった。回収の手が回らなかった。廃校になった中学校が二つ、釜石にあった。全部、遺体をそこへ運んだ。日がたつと次々にながってくる。自衛隊が来て、がれきを撤去すると出てくる。遺体は目の周りが黒くなっている。処理用の寝袋に入れて、番号をつけて、ジッパーを開けて見た。

釜石では一日に一四体ずつ、朝六時から夕方五時まで焼いた。窯が三つある。それでも間に合わなかった。急ぐ人は自分で内陸のほうの火葬場を見つけてきた。釜石市は秋田県の横手市、大仙市に運んだ。市では土葬にしますと発表した。しかし、もう一回見てみようという人が多かったので、土葬をやめた。志津川では土葬にして掘り返した。身元不明の人が多かった。顔がふくれてるから分らない。目が腫れたりしている。友人などが見ると、似ているといつて、あっている場合があった。家族は似ていない、ということが多かった。損傷が激しい遺体は、写真を撮って火葬にした。身元不明者をいかに早く火葬するかが問題だった。どこで発見されたか、死亡時刻は何時かを書いていた。ほとんど三時二五分ごろになっていた。

防潮堤は震災前一二・五mだった。それを二四・五mにするという。国が決めた。地元ではいらないといっている。今のを直せばいいといっているが、国が決めた。地元では、金を使うんだつたら、団地を作ってほしいといっている。五軒まとまれば団地とみなすという。五千万ならいいが、それ以上は造成費を出さないという。一軒に一千万以上かけるのはだめという。

家を作るのをあきらめている人が増えている。七〇代の人、ローンも組めないし、建てても子どもたちも帰ってこない。去年の今ごろ（平成二三年八月）はみんな家を作ると頑張っていた。風呂、トイレつきで、二間ぐらいの家なら一千万で建てられる。震災アパートに入るうという人が多くなった。これから作る。どこも作っていない。来年、釜石で第一号ができる。ほかの市町村も住民のことは進んでいない。ここには、これ以上の高台がない。釜石は山が急峻。造成も難しい。小白浜では、公民館の向かいに震災アパートを建てるという計画が出ている。一人ぐらしは一フロア。リビングが広いのであとで仕切れるという。地域のなかで住みたいという人が多い。小白浜の人は小白浜に住みたいという。市でも丁寧に住民の希望を聞いている。片岸では小白浜のアパートに入りたいという人が出ている。今のところ、公民館の向いと、国道の上の仮設を取っ払ったところに二棟ぐらい建てるといふ。小白浜と片岸を入れて、ぎりぎりなんとか入れる。市は丁寧に聞いてくれるが、示された分だけでそれ以外にない。個人の土地の所有者に交渉もしていない。じゃあこうしようということも半歩でも示さないとけない。

震災アパートは、入った人が亡くなると空き部屋になる。次に入る人はいない。どんどん過疎地になっている。今は商店がない。一軒だけ。町の仮設に入る人もいる。病院に通ったりするために、町の仮設を選んで入っている。この前の盆に寺へ来て、こっちは帰らない、という八〇代のおじさんがいた。町の震災アパートを申し込んだという。店と病院が近い。ここは交通が不便。人が入って雨風をしのげたらいいというのではなく、盆、正月に子どもたちが帰ってきたときに使えたり、息子たちがリタイアしたときに入ってもいいと思うような建物を建ててもいいと思っている。今朝、募参りにきた七六の人は、年金生活で、月に二万七千円程度の年金で暮らしている。アパート家賃は二万円とすると七千円で生活しないといけない。収入によって家賃が決まる。安いので一万八千円ぐらい。市議員が淡路、大阪のほうに震災住宅の視察に行ってきた。孤独死が多いという



▲写真 36 盛岩寺境内に建つ明治の津波記念碑（右側）と昭和の津波記念碑（左側の大きな石碑）(2012年3月撮影)

が、ここでは当てはまらないのではと思う。みんな親戚みたいなものだから。

八八歳のおばあさんが仮設住宅にいる。息子は仮設で葬式は出したいくないという。一〇月からこの下に家を建てることができなくなる。規制ができる。そのおばあさんの息子は、その前に家を建てようか、といった。釜石は一〇月から規制される。

この辺りでは文化財の救助はなかった。釜石市では毎年一回、秋に文化財のパトロールをしている。去年はできなかった。今年六月に沿岸部だけおこなった。被災、損傷を確認した。

去年はマスコミがたくさん来た。東京、地元と別々に来た。公民館で聞いて、お寺へ行けと言われてよく来た。今年になって、大学の人が来るようになった。来月、文科省から調査に来る。寺、神社を回って聞き取りをするという。

去年のお盆をすぎて落ち着いてきた。支援物資が来たという放送があっても、もらいに行かなくなった。七月から八月に仮設に入り始めた。盆前までに入れるように、ということが入った。仮設に入ってから落ち着いてきた。

明治二九年の津波は昭和八年よりも波が高かった。場所によると一八m来ている。道路が二〇mある。

唐丹の本郷地区では昭和八年の津波で三〇〇人亡くなった。海に近しいところは危ないので、海の見えないところに住宅地を作った。長年のうちに、もと家があった場所にベツカを建てるようになった。当時は買い上げてくれなかった。自分の名義になっているので、息

子たちに家を建ててやった。その人たちが今回の津波でやられた。

明治二九年の津波では檀家で一六八〇人亡くなっている。昭和八年には三六〇人亡くなっている。今回は小白浜では病気の人が二人亡くなった。唐丹全体では一二人亡くなった。檀家では二六人亡くなった。檀家で亡くなった人のうち、釜石で働いていた人は一五人。釜石では海を見ていないので、足元まで波が来て、膝まで来て逃げた。

唐丹は七五〇〜七六〇戸。そのうち被災したのは三八〇戸ぐらい。床上浸水



地図7 気仙沼市



▲写真 37 亀山から望む大島（田尻地区は右側）(2012年3月撮影)



▲写真 38 気仙沼港と大島を結ぶフェリー(2012年3月撮影)



▲写真 39 小野寺氏宅近くの田んぼ(2012年3月撮影)

五 宮城県気仙沼市
1 市街地

気仙沼市出身の川島秀一氏は、リアスアーク美術館に勤務していたときに震災にあった。その後、川島氏は津波の体験談も含めて、多数の著作を著わしている〔川島 二〇一二〕。あらためてここで取り上げるまでもないが、

なども含めて。小白浜は二〇〇戸ちよつと。被災したのは一〇〇戸近く。そのうち全損したのは七〇戸近く。昭和八年の津波のあと、下で商売をしてもかまわない、ただし、寝るところは高いところの家にしなさいということになった。みんな、めんどくさいので下に家を建てた。



▲写真 40 薬師の前の清水（2012年3月撮影）

平成二四年（二〇一二）三月に直接うかがったことを簡単に記させていた
だけ。

チリ地震津波のときは小学二年生だった。家の中まで津波が来たが、
流されなかった。明治、昭和の津波は気仙沼はとくに何もなかった。い
ずれも北からの津波だったので大丈夫だった。今回の津波は南から来
た。

三月一日は職場にいた。六mの津波が来ると放送が入った。見てい
ると、砂ぼこりが立ってきた。津波が来たと分かった。母親は行方不
明。家にいたという説と、だれかの車で逃げようとしていたという説も
ある。その車は見つかったが、だれも乗っていなかった。何回もの津波
で火が流されて燃えていた。

当日、川島氏は美術館に泊まった。翌日、山のほうから家に近づいた。土台だけ残して何もなかった。しばらく美術館に泊まった。電気がないので、暗くなる前に寝る場所を確保した。気仙沼は半分残った。

2 大島

気仙沼湾の入口に大島がある。大島は田尻などの地区がある。大島には、平成二四年（二〇一二）三月に訪れた。田尻地区の小野寺源一氏（昭和一四年生まれ）は以下のように語る。

昭和一四年生まれだから昭和八年の津波は知らない。チリ地震津波は経験した。このときは、静かに水が上がってきたので立っていられた。ひざぐらいまで上がった。震災の前の年にもチリ地震の津波があった。



▲写真 41 港の灯台に引っかかった船のマスト（2012年3月撮影）



▲写真 42 小学校校庭に設置された仮設住宅（2012年3月撮影）

チリ地震津波のことが頭にあつたから、今回もその程度だと思つていた。地震のときは妻と船に乗つて作業をしていた。がたがた揺れて立つていられなくなったので作業をやめて帰つた。一度家に帰つたが、様子を見に行こうと車に乗つて出かけようとしたら、津波が上がつてきた。家へ帰れなくなったので、学校のほうから高台をずっと回つて家へ帰つた。大きな家が流れてきた。自分の家はかろうじて助かつた。家の石垣のところまで津波がきた。家の前の田んぼにはタンスや冷蔵庫が流れてきた。かなり最近までそれらはあつた。ようやく片付いた。田んぼは作れなかつた。今年も作れないと思う。

田尻地区は一三〇軒あつた。このうち四〇軒流された。死んだ人は四人。一人行方不明。大島全体で亡くなつたのは二九人か三〇人。崎のほうは流された家が少なかつた。浦の浜では六〇〜七〇軒流された。近くに山があるから多くの人が助かつた。二階に上がつた人は流された。家族、親戚は大丈夫だつた。

大島は水でつかつて三つに分かれた。今回の津波は来るのも引くのも早かつた。大島は渋滞がないから車で逃げて助かつた。気仙沼は渋滞していて車で流された人が多い。窓の開閉がハンドル式の車に乗っていた人は逃げられた。ボタン式の人は開けられなかつた。

大きな重油のコンビナートが燃えた。すごい音でばーん、ばーんと鳴った。船が外浜に流されてきて火が山に燃え移った。大島神社も危なかった。神社の神輿を一時、薬師のところへ持ってきた。

船がなくなつたので物資が来なかつた。大変だつた。長く、電気、水道が止まっていた。海底の水道管の上に、大きな船が突き刺さつた。五〇日間、ろうそくで生活した。田尻の公民館では危ないので、学校に避難した。自分は家があつたのでよかつたが、家が流された人は、下着の替えもなかつた。自衛隊が来て物資を運んでくれた。アメリカの海兵隊も来た。自衛隊の風呂に入った。飲み水がないので、薬師の前の清水を一〇〇人の人が汲みにきた(写真40)。並ぶので、夜に汲みにきた人もいる。自分の家には井戸があつた。学校のプールの水も浄化して飲んでいた。ろうそくも足りなくなつて、寺のろうそくをもらつた。

広島からフェリーを貸してくれた。広島からカキ養殖のための孟宗竹三〇〇〇本を贈ってくれた。カキいかに一〇〇台分になる。フロートも一二〇〇くれた。広島からの援助はありがたかつた。三陸のカキがだめになると、広島のカキの値段が上がるのに、助けてくれた。広島からの援助は、津波前の実績で配分した。カキは出荷できるまで三年かかる。こんなに海に何もなくなつたら一年で育つ。いつもは過密だから三年かかる。何にもない早い。

三、四、五月は生きるために夢中だつた。今も忙しい。一段落したら心がおかしくなるのではないかと思つている。心のケアが必要になつてくる。

つとめて海さ行かないようにしている。悲しくなる。自分の船のマストが灯台にかかっている(写真41)。倉庫のところでは、大きな木の一五mから一七mほどの高さに畳が引つ掛かっている。

息子は仕事をやめるように言っている。年なのでやめようかと思つている。政府の支援だと五年間仕事して返済していかないといけない。

津波の記憶



▲写真 43 原釜の集落跡（写真奥に見える丘の向こうが尾浜）(2012年11月撮影)



▲写真 44 津波が通った跡（船越と呼ばれる原釜と尾浜の中間地点付近）(2012年11月撮影)



▲写真 45 尾浜から船越を通して原釜方面を望む（2012年11月撮影）

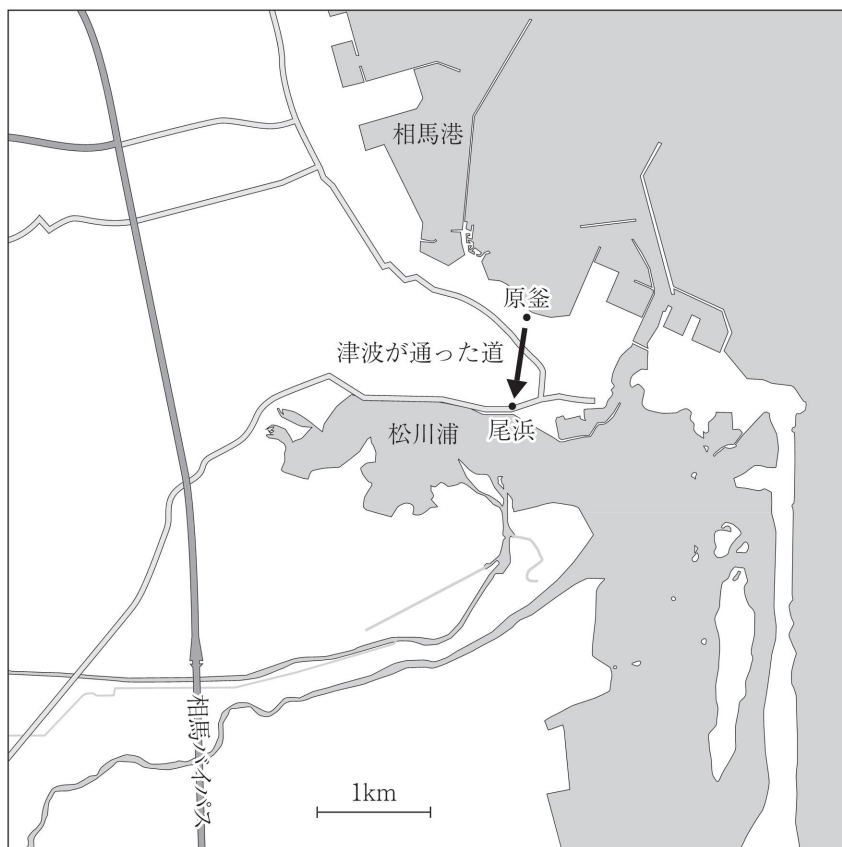
六 福島県相馬市

田尻地区の行事はすべてやっていない。学校の行事だけやっている。

相馬市の松川浦は景勝地として知られていた。松川浦に面する尾浜地区には旅館が多い。平成二四年（二〇一三）一月に相馬市を訪れた。旅館を経営する久田浩之氏（三〇歳）は、津波の体験を以下のように語る。尾浜も津波がきた。津波はなめていた。寝たきりのじいさんがいるので逃げなかった。おばあさんも一緒に逃げなかった。

原釜（尾浜の北側の地区で外海に面している）は津波で家が流された（写真43）。二二〇人ぐらい亡くなって

いる。引く波と次に来た波がぶつかって、山を越えて亀屋旅館のほうまで来た。津波は細い道を通ってきた（原釜から尾浜に抜けるには小高い丘を越える。そのあたりを船越という）。そこは何もなくなっている（写真44・45）。旅館は玄関まで来たが、被害はなかった。灯台（鶴ノ尾崎灯台）のあたりに山があったのでここには直接こなかった。津波は砂州も越えてきた。砂州はずたずたで通れない（写真46）。深くえぐられている。景色のきれいなところだったが、見るところはなくなった。湾の奥にある



地図8 相馬市松川浦



▲写真 46 松川浦の砂州（2012年11月撮影）

コンビニのあたりまで波は入った。湾の左側は手つかずになっている。松がたまっている。右側のほうは松を撤去した。もともとは自然の砂州だった。砂州の間に海との通路があったが、そこを埋めて、灯台あたりの山を掘って、船が通れるようにした。津波の前に、灯台の下の辺りに港を作った。それまでは、砂が出たり入ったりしていたが、港を作ったので砂が入らなくなっていた。アサリ、ホタテ、クロノリなどが育たなくなっていた。津波のあと、一年ほど海の水が入ったので、湾の中がよみがえった。アサリ、ホタテ、クロノリが育つようになった。ところが、川が流れ込んでいる付近でセシウムの数値が高く出た。今は砂州のところに、石を入れて海と隔てるようにした。漁業は試験操業をしている。震災後に捕っていなかったもので、いろいろ捕れる。検査をして一部売っている。収入は国に入るので、漁師はやる気が出ない。

旅館は一か月ほどして再開した。仮設住宅を作る人たちを泊めた。最初に泊めたときは、まだ電気がきていなかった。昼間働いて、暗くなったら寝るだけだった。テレビもなかった。スーパーに食べるものが売っていないので、食事を用意できなかった。支援物資のカップラーメンを出していた。食堂で一緒に食べていた。電話は四、五か月してから通じた。火力発電所も津波で破壊されて燃えた。これを壊して、作りなおした。五〇〇〇人規模で工事関係者が来た。火力発電所の関係者をずっと泊めていた。今は少なくなっている。原発は五〇キロあるので、原発の関係者は泊っていない。除染の人たちは泊っていた。

磯部はこのあたりで一番被害がひどかった。何もなくなっている。

七 福島県いわき市

1 豊間

いわき市豊間は、昭和初期に行われた海村調査の際には、山口弥一郎が訪れた地区である。山口は柳田国男に津波を民俗的に調査することを勧められ、昭和一〇年（一九三五）以降に意識的に津波のことを聞き取りをした人物である。この山口も昭和一四年（一九三九）に豊間で聞き取りをした際には、以下のようなことを聞いただけであった。

何年頃カワカラヌガ、正月七日ニアッタトイフ

十月二十日ノエビス講

二、四十年前家ガ流サレナ



地図9 いわき市豊間、中之作

ていた。お客が来ていたら大変だった。食事の準備をしていたときに地震があった。外へ出たが、立ってられないぐらいの揺れだった。津波の情報があったので、車で民宿の本館（高台にある）へ逃げた。本館に着いて三〇分ぐらいしたら津波が来た。本館から津波がくるのを見ていた。この辺りの人は本館に逃げてきた。年寄りは一歩でできた。一波のあとに、真つ黒い波がきた。どどーっと流れてきた。上の道路まで家が流されてきた。民宿の辺りで煙が上がるのが見えた。二階の食事をする場所の電球が囲炉裏に落ちて燃えているのかと思ったが、前の家の車庫で車が燃えている煙だった。車庫の中で燃えたので、ほかには移らなかつた。須佐の奥に家がある。須佐の浜は、津波でかなりやられた。どこから火が出たかわからないけど火事にもなつた。民宿を手伝ってもらっている若い夫婦のサーファーがいた。民宿の近くのマンションを借りていた。津波を見ると、堤防にいたの



▲写真 47 豊間の民宿（民宿背後の山の右側に民宿の本館がある）（2012年11月撮影）



▲写真 48 豊間から塩屋埼灯台を望む（2012年11月撮影）

カッタガアツタ

月日から見て、明治二九年、昭和八年の津波ではないと思われる。福島県浜通りにおいて、昭和初期の時点では、今回のような津波の記憶がなかつたということが分かる。筆者は、平成二四年（二〇一二）一二月、豊間において、民宿の手伝いをしている七〇歳ぐらいの女性に話をうかがった。

あの日は一二人ほど予約が入っ

で、逃げなさいと本館に連れて行った。行かなかったら、流されていた。その夫婦は犬を飼っていたので、本館で寝ずに、車で二、三日寝たという。自分は、知り合いが車で帰るので乗せてもらって自宅に帰ることができた。道路はがれきで通れなかった。迂回すると帰れた。何日も自分の車を取りにこれなかった。

このあたりの人はその後、高台にある老人介護施設に避難にした。あんな津波が来るとは思わなかった。年寄りには、津波はたいしたことがないといって、逃げない人も多かった。

民宿は流れなかった。階段の途中まで波がきていた。窓ガラスを割って、一階に泥が流れ込んだ。一階の奥の和室の畳が上がった。ほかは何もなかった。周辺の家は流れたというより、壊れたので、取り壊した。いずれ、道路になるというので、これも立ち退かないといけない。



▲写真 49 中之作を襲った津波（2011年3月11日、松本茂氏撮影）



▲写真 50 中之作を襲った津波（2011年3月11日、松本茂氏撮影）



▲写真 51 中之作を襲った津波（2011年3月11日、松本茂氏撮影）



▲写真 52 松本茂氏が津波の写真を撮影した高台（2012年11月撮影）

海岸に大きな岩が二つ立っていた。津波で一つが折れた。夫婦岩のようになっていて、きれいだった。今は一本しかない。民宿の前の自販機が流されて、奥の家のほうまで流れていた。

2 中之作

平成二四年（二〇一二年）十一月、中之作を訪れた。いわき市中之作の松本茂氏（大正一三年生まれ）は自分の家の近くにある高台から津波の写真を撮影していた。今回、その写真を提供いただくことができた（写真49・50・51）。松本氏は以下のように語る。

自分が区長をしているときに、避難訓練を三回した。神社、山など四か所を避難所にした。そんな津波が来るのか、といわれたが、危険性があるからやった。今回の津波では、みんな誘い合って高台に避難した。中之作では一人も死ななかった。誇りに思っている。下にあった家は流された。道路の上は大丈夫だった。津波は中山病院の玄関まできた。神社の通りは倒れた。自分の家も地震の被害があったので、現在修理している。

地震のあと、高台に上がって写真を撮った。長田稲荷のあった場所から撮影した。いったん逃げて、カメラを取りに戻った。（昭和八年の津波は来たのか、という問いに対して）ここには来なかった。チリ地震津波もたいしたことがなかった。（なぜ津波の危険性を感じていたのか、という問いに対して）ワカメの仕事で三陸のほうに行っていた。子どものころ、「稲村の火」（安政元年（一八五四）の安政南海地震による津波の際、和歌山県広

川町の浜口梧陵が稲藁に火をつけて住民を避難させた話」を習っていた。津波は必ず来ると思っていた。

おわりに

民俗調査ではさまざまな生活にかかわるお話をうかがう。しかし、意識をしないと薄い内容しか聞き取ることができない。筆者は東北以外でも多くの沿岸地域を回ってきたが、とくに東日本大震災後、そのことを痛感している。津波に限らず、人々が災害にどのように向き合ってきたのかを考えるために、災害の民俗というものを強く意識していく必要を感じている。

(参考文献)

岩手日報社編 二〇一一年 『大津波復興への証言 明日への一歩 2011.3.11東日本大震災 岩手の記録Ⅱ』 岩手日報社

川島秀一 二〇一二年 『津波のまちに生きて』 富山房インターナショナル

(付記)

東日本大震災前の聞き取り調査、および写真撮影は、平成十一年(一九九九)五・八・九月、平成十二年(二〇〇〇)七・八月に筆者が実施したものである。これは、成城大学民俗学研究所の研究プロジェクト「沿海諸地域の文化変化の研究 ―柳田国男主導『海村調査』『離島調査』の追跡調査―」による調査であった。震災後、平成二十四年(二〇一二年)には、近畿大学民俗学研究所のプロジェクトとして、三月・八月・十一月に東北沿岸部を回った。なお、調査の一部に、近畿大学平成二三年卒業生の奥村美美氏、水口小百合氏、山下洋平氏も同行した。お話を

うかがった方々に感謝するとともに、被災にあわれたすべての方々^に哀悼と共感の意を表したい。一日も早い復興を祈りつつ、このたびの震災を忘れることなく、自分自身が次世代に伝えていくことを肝に銘じておきたい。

なお、写真については、注記のない限りはすべて筆者の撮影である。